

「潮の匂い」

峰崎成規

通勤帰りの電車が駅に入り、
ドアが大きく開いた。
突然、東京湾の湿めった空気が私を包む。
きつと明日は雨だろう。
潮の匂いは、昔から雨の合図だ。

遠い昔、
晴れた日の海苔簾は、潮の匂いがした。
遠い昔、
晴れた日の蓮田の向こうからは、いつも潮の香がやってきた。
遠い昔、
海苔とり舟も

海髪おことり舟も

晴れた日の眩しい海面を、
潮の香いっぱい吸いながら、
みずすましのように行ったり来たりした。

今、干潟は町から遠く離れて行った。
もう、晴れた日に潮の香りがほんのりと町を包むことはない。

目覚めると、雨音がする。
やはり、雨降りだ。
駅への道に、潮の匂いのぎっしり詰まった雨が降り続く。
雨の日は、やはり潮の匂い。
そして、今日は、梅雨入り。